

四季の子ども①

春という生活

川田学

(大学教員)

季節の子

ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『森の生活』^註は、春で終わる。

森の生活、という憧れのような響きなのに、目次が「経済」から始まったりして、お世辞にも読みやすい本ではない。けれど、長い思索の後に春で終わる構成が、なかなかにくい。

四回のエッセイを依頼されて、すぐに思いついたのは四季だった。子どもと四季、子どもの四季、といろいろ考えてみたが、結局「四季の子ども」とした。なんとなく、四季が先で、子どもが後だと思ったからだ。子どもと暮らしていると、われわれが四季の中で生きていることを実感する。四季の中に生きる子どもについて、考えてみたいと思った。

私の専門は、発達心理学である。専攻しているのだから、意義を認めているし、人間の発達を研究することの奥深さをいつも感じている。でも、あまり季節感のない思考方法だとも思う。科学なのだから当然との向きもあるだろうが、本当にそうだろうか。なぜ、動物や植物の成長研究と季節は切り離せないのに、人間では無視できるのだろうか。

川田 学(かわたまなぶ)

北海道大学准教授。専門は発達心理学。子どもの見方を柔らかくする発達研究を模索中。著書：『0123 発達と保育』(ミネルヴァ書房)ほか。

子どもとの生活、子どもの振る舞い、子どもが変わっていくとき、これらは季節と無関係に起こっているのか。こんなに近代化しても、私たちの生活は季節のリズムと調和しようとする。子どももまた、季節の子なのではないか。そんなことを背景に置いて、あれこれ考えてみたい。

子も萌える

さて、春である。

関東から西では、二月も末になると、日中の気温が二ケタに届き、身も心も軽くなる。園庭や散歩の子どもたちの声も弾んでくる。日差しや湿度や若芽の色なかに、春を感じる。三寒四温の陽は確実に大地を暖めて、子どもをうきうきさせる。気温の上昇は、子どもの遊び世界の広がりのキエチーフ（キエチーフは「静機」である）である。北国では、ちよつと事情が違う。私の住む札幌辺りでは、春の兆しは三月あたりから認められる。ただ、悩ましいのは、気温の上昇が、ぐちゃぐちゃの地面を作ることだ。夜には氷点下になり、翌朝、すさまじい造形のカチカチ地面が現れる。歩くのにも神経を使う。氷点下10度の銀世界のほうがはるかに遊びやすい。雪国では、このジレンマに二か月ほどさらされて、やっと五月の連休あたりから本格的な春を迎えることになる。

梅と桜が一緒に咲き、草花が一斉に成長し始める。その勢いたるや、関東育ちの私には驚き以外の何物でもない。これが「萌える」ということなのかと、最初の春に至極納得したものだった。植物と同じように、東京の二か月遅れくらいで、子どもたちの心身が躍動し始める。五月に全国一斉で体力測定をしているけれど、「四季の子ども」論からすると、あれはいかにもナンセンスではないか。

札幌近郊のある幼稚園では、一年間を六季に分けて年間教育計画を立てることにした。春夏秋冬の間に、初夏と初冬を挟んだのである。園庭以外に森での活動を取り入れたこともあり、六季で計画を立てたほうが自然をより繊細に感じ取れるというねらいがあるようだ。北国の保育者らしい感性を思う。厳しい冬にどうしても籠もりがちになるのだから、その入り口である初冬をどう暮らすか、そして、夏が来るとすぐに秋になってしまふのだからその前を初夏として切り出して、どのように保育の充実と結び付けていくか。まさに、「四季の子ども」へのアプローチだと思ふ。

別れと出会い、あるいは「逆スィミー」

春は、別れと出会いの季節でもある。でも、この感性は、自然と文化の歴史的な複合体である。私たち日本人は、もう長い間、春は別れの儀式と出会いの儀式で節目を刻んできた。春という響きには、うきうきとした期待感と共に、どこか惜別感も伴っている。そういう感性は、いつ頃どのように子どもがまとうようになるのだろう。幼児は、卒園式での別れの悲しみと、入学式での晴れ晴れした気持ちとを、それぞれ別のものとしてではなく、一つの春の感情としてつかまえるだろうか。

少なくとも、遠い日の私にはそんな感情的複合体は宿っていなかったようだ。保育園の卒園式の記憶は皆無である。私は四月生まれなので、卒園の時はもう七歳に近かった。でも、なーんにも覚えていない。先生方には正直、申し訳ない気持ちである。一方で、小学校の入学式はいろいろな記憶が残っている。ベビーブームで全校児童二千近く、第一学年は四十五人の七クラスだ

った。急ごしらえのプレハブ教室に押し込まれて、廊下はベニヤ板で子どもが走り回るとぐわんぐわんと波を打った。

若い両親の合理主義が、私の入学式を彩っている。二つ下に妹がいるので、その子の入学式でも着られるようにと、真つ赤なブレザーを買ったのだ。クラスの誰よりも多動だった私は、金魚のようなブレザーを着て、大いに目立った。子どもにも派手だとわかる金魚ブレザーに、服にまったく関心のなかった私も少しためらった記憶がある。

式の記憶はない。式後のクラスごとの写真撮影の記憶が、アルバムを繰り返しめぐりながら母が面白おかしく話したエピソードと共にある。私のクラスは、落ち着きのない私とうめちゃん（後で仲良しになる）のせいで、何回も撮り直しになった。紺ブレ（ザー）だったうめちゃんはまだいい。私は「金魚」だったのだ。紺の集団の中、たった一人の真つ赤っか。レオ・レオ二作『スイミー』の逆バージョンである。気が気でない母の耳に、保護者席からひそひそ話が聞こえてきた。「ああいう子に限って、赤、着せるのよね……」。

私の春の感情生活はこうして始まった。ソローの『森の生活』のように高尚ではないが、確かに今の自己を構成する一部である。

注

- 1 H・D・ソロー『森の生活（上・下）』飯田実訳 岩波書店 一九九五年
- 2 キエチーフ (quietiv) とは、文芸用語で主題（モチーフ、動機）を潜在的に支える契機を意味する。

「静機」という訳語は、作家・開高健（一九三〇・一九八九）の訳出らしいが定かではない。開高の例でいうと、「イルカ」をモチーフとした絵を描くとき、そのキエチーフは「海」となる。